

群 教 セ	F 08 - 01
	平 30. 269 集
	生徒指導

自己の存在感を実感できる生徒の育成

— 互いを認め合う『NICEカード』の活用を通して —

特別研修員 増山 肇

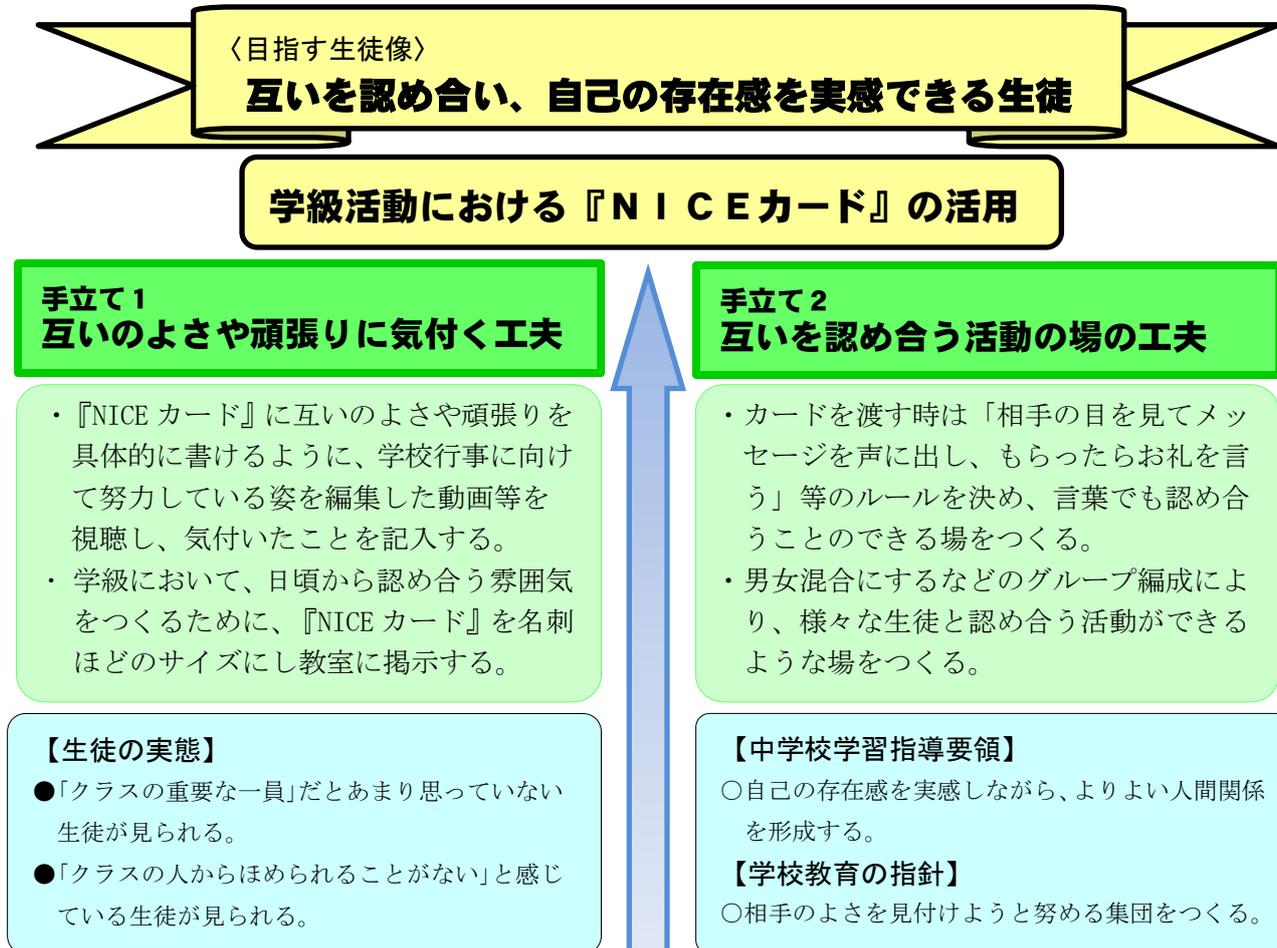
I 研究テーマ設定の理由

中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）の総則には、生徒の発達の支援として「生徒が、自己の存在感を実感しながら、よりよい人間関係を形成し（中略）生徒指導の充実を図ること」と示されている。また、群馬県教育委員会の「平成 30 年度学校教育の指針」においても、「いじめ・不登校の未然防止に向けた教育活動の充実」として「自他の個性を尊重し、互いの身になって考え、相手のよさを見付けようと努める集団」を学校経営の重点の一つとしている。

平成 30 年 4 月に本学級の生徒を対象に実施した自己の存在感に関するアンケート調査では、「わたしは、クラスの重要な一員だとあまり思わない」と回答した生徒は 32%、「わたしは、クラスの人からほめられることがあまりない」と回答した生徒は 35%であった。この結果から、クラスの中で自分がかけがえのない存在であるという意識が低いまま学校生活を送っている生徒がいることが分かった。また、クラス替えがあり人間関係や環境の変化により不安を抱える生徒も見られる。これらのことから、生徒が人との関わりの中で互いを認め合い、自己の存在感を実感し生き生きと活動できるようにすることが必要不可欠であると考え、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

『NICE カード』とは、仲間のよさや頑張りに気付き、それを伝え合うために作成した名刺サイズほどのカードである。カードを活用し認め合う活動を行うことで、生徒が自己の存在感を実感できると考え、以下のような手立てを講じた。

手立て1 互いのよさや頑張りに気付く工夫

手立て2 互いを認め合う活動の場の工夫

学級活動において『NICE カード』を記入する前に、学校行事に向けて努力している写真や動画を編集したものを視聴し、互いのよさや頑張りに気付き、具体的な内容をカードに書けるようにした。また、学級において、全ての『NICE カード』を教室に掲示し、互いに認め合ったことを全員で共有し、日頃から認め合う雰囲気をつくった。さらに、学級活動の時間だけでなく、毎日の生活の中にも認め合う活動を取り入れることが必要であると考え、毎日の生活の中に「今日の MVP」という項目をつくり、日直が見付けた仲間のよいところを発表する活動を取り入れた。加えて、月に数回帰りの会において、日常の学校生活で気付いた互いのよさや頑張りを『NICE カード』に記入し渡し合う活動を取り入れた。

『NICE カード』を渡す時は、「相手の目を見て、メッセージを声に出して伝え、もらったらお礼を言う」等のルールを決め、カードだけでなく、言葉でも認め合うことができる場をつくった。また、男女混合にするなどのグループ編成により、様々な生徒と認め合う活動ができる場となるよう工夫をした。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 4月と10月に行った自己の存在感に関するアンケート調査から、「クラスの重要な一員だとあまり思わない」と回答した生徒は、32%から19%に減少した。このように自己の存在感を実感できた様子が見られたことは、学校生活や学校行事において一つの目標に向かって努力し、仲間のよさや頑張りを『NICE カード』に記入し渡し合ったことが、奏功したのではないかと考えられる。
- 『NICE カード』を記入する前に、努力している写真や動画を編集したものを視聴したことで、多くの生徒がカードに具体的なコメントを書くことができた。生徒からは「動画を視聴したことで、新たな仲間のよさや頑張りに気付くことができた」という感想があった。これらのことから、『NICE カード』を記入する前に互いのよさや頑張りに気付く工夫を工夫したことが奏功したと考えられる。
- 授業後に「様々な仲間から認めてもらい嬉しい」等の感想が多く生徒から寄せられた。参観者からも「恥ずかしいと思いつつも、笑顔で渡し合うことができている、女子から褒められるという経験は男子にとって貴重であると感じた」とコメントがあった。これらのことから、様々な仲間と認め合う活動ができるよう、渡し合う際の約束事を決めたり、男女混合のグループを編成したりするなどの工夫を工夫したことは、有効であったと考えられる。

2 課題

- 参観者から「『NICE カード』を記入する際に、少数ではあるが、何を書いてよいか分からなかったり、内容が具体的に書けていなかったりする生徒が見受けられた」という意見が出された。改善の方策として、学校生活の中で友達のよいところを見付けて発表することを継続して行っていく必要があると考えられる。
- 動画を視聴した場面において、参観者から「生徒が仲間のよいところを見付けるためには更なる工夫が必要ではないか」と意見が出された。生徒が活躍している様子を分かりやすく提示するために、計画的に写真や動画を撮ったり、編集の工夫をしたりする必要があると考えられる。
- クラス全員が自己の存在感を実感するためには、継続して活動していくことはもちろん、学校全体として組織的・計画的に取り組むべきであると考えられる。

実践例

1 議題名 「合唱コンクールに向けて」 (第3学年・2学期)

2 本題材について

合唱コンクールに向けて、以下の活動を行う。①1, 2年生の合唱コンクールを思い出し、中学校最後の合唱コンクールをどのようなものにしたいか考え、互いの思いを伝え合い、目標を決める。②合唱コンクールの課題曲や係を決める。③合唱コンクール本番前に今までの活動を振り返り、互いのよさを『NICEカード』に書き伝え合う。④合唱コンクールに向けて、動画を視聴しながら更に伸ばしたいところを見付け、よりよい合唱にするための方策を考える話し合い活動を行う。⑤よりよい合唱にするための方策を全員で意識しながら練習をし、練習成果を発揮しながら合唱コンクールに取り組む。⑥合唱コンクール終了後、活動を振り返る。

本題材では、合唱コンクールに向けて努力してきたことを振り返り、仲間のよさや頑張りを互いに伝え合った後で、動画を視聴しながら更に伸ばしたいところを見付けて話し合い、よりよい合唱に向けて全員で決めたことを意識しながら合唱練習を行う。こうした活動を繰り返し行うことより、自己の存在感を実感し、互いのよさや可能性を発揮しながらよりよい集団生活をつくることをねらいとし、以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	自分のよさや課題に気付き、自分はクラスやパートに必要な一員であるという自覚を高める。	
評価 規 準	集団生活や生活への 関心・意欲・態度	合唱に関心をもち、他の生徒と協力して主体的に取り組もうとしている。
	集団の一員としての 思考・判断・実践	自他のよさや課題に気付き、自分の言葉で班のメンバーに伝えることができる。
	集団活動や生活につ いての知識・理解	合唱コンクールの意義を理解し、意義を達成するために必要なことを理解している。
時間	主な内容	主な学習活動
事前	問題の発見 題材の選定	<ul style="list-style-type: none"> 合唱コンクールをどのようにしたいか考え、互いの思いを伝え合い、目標を決める。 合唱コンクールの課題曲や係を決める。 課題曲の歌詞の意味について考え、その意味を共有する。
本時	認め合う 課題を追求 実践	<ul style="list-style-type: none"> 気付いた仲間のよさを『NICEカード』に記入しメッセージを読みながら渡す。 もらった『NICEカード』や動画を視聴し気が付いたことを参考にしながら、話し合いを行い、自他の新たなよさや課題に気付く。 よさを生かしながら課題を解決するための方策について話し合い、合意形成を図る。
事後	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 互いのよさや頑張りについて振り返り、そのことを教室掲示や学級通信で紹介することにより思いを共有する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は合唱コンクールの約1週間前に行った学級活動である。合唱コンクールは、目標に向かってクラス全員が一致団結し取り組むことのできる行事であり、生徒一人一人が自己の存在感を実感することができるよう、以下の手立てを講じた。

授業改善に向けた手立て

①互いのよさや頑張りに気付く工夫

- 『NICEカード』に互いのよさや頑張りを具体的に書けるように、努力している姿の動画を視聴する。
- 認め合ったことを全員で共有し、認め合う雰囲気をつくるために、『NICEカード』を教室に掲示する。

②互いに認め合う活動の場の工夫

- カードを渡す時は「相手の目を見てメッセージを声に出し、もらったらお礼を言う」等のルールを決め、言葉でも認め合うことのできる場をつくる。
- 男女混合のグループを編成により、様々な生徒と認め合う活動ができるような場をつくる。

4 授業の実際

(1) 事前の活動

- ① 互いに認め合う雰囲気を日常生活からつくるために、日直が活躍した人を「今日の MVP」として発表したり、月に数回『NICE カード』を仲間に渡し合ったりした（図1，2）。
- ② 合唱コンクールに向けて、生徒全員が意欲的に活動できるように、互いの思いを伝え合ってから、合唱コンクールの目標を決めた。
- ③ 本時の話し合い活動を生徒が主体的に取り組むことができるように生徒の中から司会・進行役を決め、授業の前に担任と打ち合わせを行った。

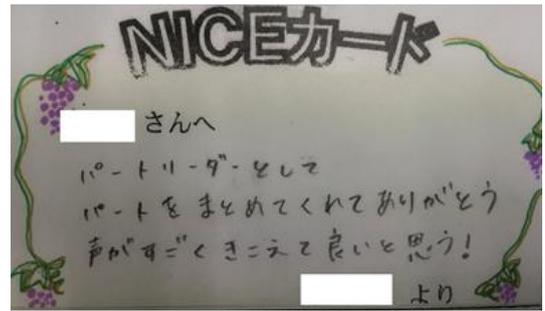


図1 『NICEカード』

(2) 本時の活動

- ① 仲間の活躍や貢献について記入した『NICE カード』を渡し合う活動を行った。カードを渡す際は、相手の目を見てメッセージを声に出し、もらったらお礼を言うことを約束事にし、言葉でも認め合う活動をした。

『NICE カード』に書かれていたメッセージ

- ・いつも隣でしっかり声を出して歌えている。おかげで私もしっかり声が出せるよ。
- ・いつも隣で歌ってくれるからとても心強い。
- ・後ろから声が聞こえてきて後押しされている感じがする。とても歌いやすい。
- ・いつも気にかけてくれてありがとう。頼りになるよ。



図2 『NICEカード』を渡し合う様子

- ② 練習している様子の動画を視聴し、新たに気付いた仲間のよさやよりよくしたいところを見つけ、付箋に書き込んだ（図3，4-ab）。



図3 動画を視聴しているの様子



図4-a 付箋に書き込む様子



図4-b 付箋に書いたよさや課題

- ③ パートごとにグループになり、新たに気付いた仲間のよさやよりよくしたいところを発表し合い（図5-a, b）、よりよい合唱にするための方策を考える話し合い活動を行った。



図5-a 男子パートの話し合い活動の様子



図5-b 女子パートの話し合い活動の様子

- ④ 最後に話し合い活動で合意形成したことを意識して1番を歌い、本時の振り返りを行った。振り返り活動の中の「クラス・パートに必要な一員だと思いますか」の問いに対して、83%の生徒は必要な一員だと答えたが、必要な一員だと思わないと答えた生徒が17%いた。生徒から寄せられた感想は以下の通りである。

授業後の生徒の感想

- 『NICE カード』に僕のよいところを見て褒めてくれ、大切な一員だと思った。
- 『NICE カード』に大きい声を出してくれありがとうと書いてくれ嬉しかった。
- 自分は声が出ていると友達に認めてもらい、クラスの力になれていると思った。
- クラス合唱なので、一人でも欠けたら合唱が出来ないと再確認した。
- やや地声になりがちで、まだ足りないところがあるから、更に頑張りたい。
- ほめてもらったけど、まだ、納得のいく声が出ていない。もっと頑張りたい。

加えて参観者からは、以下のようなコメントが寄せられた。

授業後の参観者の感想

- 『NICE カード』を渡し合う時、互いに笑顔で行っていた。特に、女子が男子に『NICE カード』を渡すと男子がとても嬉しそうにしていた。
- 動画を視聴した結果、仲間の活躍や頑張りに気づき、『NICE カード』に具体的なコメントを記入することができていた。
- 全体や話し合い活動の司会を生徒が行っていたので、主体的に授業に取り組んでいた。
- 『NICE カード』に少数ではあるが、何を書いてよいか分からない生徒がいたり、内容が具体的に書けていなかったりする生徒が見受けられた。
- 練習している様子は、パート毎に映像を撮り、生徒に見せた方がよかったのではないかと。そうすることで更に自分たちを振り返ることができたのではないかと。

(3) 事後の活動

パートリーダーが中心になり、本時の活動で合意形成したことを意識しながら合唱練習に取り組んだ。合唱コンクール終了後は、互いのよさや頑張りについて振り返り、振り返ったことを教室掲示や学級通信で紹介することにより思いを共有する。

5 考察

授業実践後の自己の存在感に関するアンケート調査では、「わたしは、クラスの重要な一員だとあまり思わない」と回答した生徒は32%から19%に減少し、「わたしは、クラスの人からほめられることがあまりない」と回答した生徒は35%から14%に減少した。このように自己の存在感を実感できた様子が見られたことは、本時の授業で『NICE カード』活用し認め合い活動を行ったことと日頃から認め合う雰囲気をつくるよう心がけていたことが奏功したのではないかと考えられる。

授業実践では、多くの生徒が具体的に『NICE カード』を書くことができ、笑顔でカードを渡し合うことができた。『NICE カード』をもらった感想を聞くと、「ビデオを見たことで新たな友達のよさや頑張りに気付くことができた」などの発言があった。『NICE カード』を記入する前に互いのよさや頑張りに気付く工夫を図ったことが奏功したと考えられる。振り返りでは、83%の生徒が自分はクラス・パートに必要な存在だと答え、その理由は、「仲間が『NICE カード』に大きい声を出してくれありがとうと認めてくれた」などのコメントがあった。『NICE カード』を活用し認め合い活動を行った際に、言葉でも認め合うことのできる場や様々な生徒と認め合う活動ができるような場をつくることが有効であったと考えられる。

しかし、数名ではあるが、『NICE カード』を記入する際に、何を書いてよいか分からない生徒がいたり、内容が具体的に書けていなかったりする生徒が見受けられた。改善の方策として、学校生活の中で友達のよいところを見つけて発表することを継続して行っていく必要があると考えられる。これらの認め合い活動を継続的に行っていくことで自己の存在感を常に実感できるようにしていきたい。